様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００４９５

研究課題名（和文）日本におけるギリシア悲劇の受容形態と世界的発信に関する実証的総合研究

研究課題名（英文）Reception of Greek Tragedy in Japan and its Global Diffusion

研究代表者
野津　寛（Notsu, Hiroshi）

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：２０４０２０９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：コロナ禍によって生じた様々な行動制限のため研究目的の達成が危ぶまれたが、海外における英語による研究会の開催、仏語による研究成果の発信、海外研究会者たちとの密接な連絡と交流を通じて、あくまでも国際共同研究というステージに立脚した古代ギリシア悲劇の受容研究という国内では相変わらずマイナーな研究領域において、国際的な期待に応える成果を実現すると共に、日本におけるギリシア悲劇受容（特に東京大学ギリシア悲劇研究会）に関するデータベースの技術的な諸問題をおおむね解決し、次年度からの研究計画に繋げることが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在の欧米においては、古代ギリシア悲劇の受容（翻訳・翻案・上演）に関する実証的研究が古代ギリシア悲劇研究の欠くべからざる部分と見なされている。日本においては、古代ギリシア悲劇の受容研究は相変わらずマイナーな研究領域に留まっており、この点について日本のギリシア悲劇研究者たちは国際的な期待に応えることが出来ていないという現状がある。本研究は国際共同研究というステージに立脚して、国際的な期待に応えるべく、日本におけるギリシア悲劇研究及び受容に関する研究の空白を埋め、基盤研究（C）17K02590で得られた知見をもとに、これまで漠然と前提としていた仮説をより明確な形で世に問うという意義を有する。

研究成果の概要（英文）：Due to various restrictions on activities caused by the COVID-19 pandemic, there were concerns about achieving research goals. However, through the organization of research conferences in English abroad, dissemination of research outcomes in French, and close communication and interaction with overseas researchers, the study of the reception of ancient Greek tragedies, which remains a relatively minor research area domestically, was firmly grounded in the stage of international collaborative research. As a result, we were able to achieve results that meet international expectations and largely resolve technical issues related to the database on the reception of Greek tragedies in Japan, particularly the Tokyo University Greek Tragedy Research Group, thus laying the groundwork for research plans in the next fiscal year.

研究分野：ヨーロッパ文学研究

キーワード：ギリシア悲劇　西洋古典学　比較文学　受容研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 29 度～令和元年度に行った基盤研究（C）17K02590「日本におけるギリシア演劇の受容と世界的発信に関する実証的総合研究」を発展的に継承し、問題意識をよりいっそう先鋭化するものであることを意図した。先行する研究（17K02590）における具体的な研究課題を追究するなかで、本研究課題に関連する以下の気づきを得た。

（１）近現代日本における古代ギリシア・ローマ演劇受容（翻訳、翻案、上演）の実態に関する網羅的調査を行うなか、我々は東京大学ギリシア悲劇研究会の上演活動に関する未公開の新資料を多数発見した。そして、それらの資料の所有者たちと直接コンタクトを取るうちに、同研究会の資料をデジタルアーカイブ化することが現在最も重要な課題であると認識した。

（２）また、網羅的調査を行ったことで、日本の古代ギリシア悲劇の受容と上演の活動全体が、日本固有の伝統演劇の諸要素を積極的に活用するかしないかという根本的な選択の相違によって、受容の２大類型に分類できる可能性があると考えるに至った。

（３）西洋人による日本の伝統劇（能、歌舞伎等）の研究と受容が、西洋の古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容に与えた影響を調査するなかで、我々は、日本における古代ギリシア悲劇の研究や上演活動について、それらの多くが内向きの、日本人による日本人のための研究ないし上演活動へと固定されていく状況を確認し、その背景に、儀礼的パフォーマンスに関する比較論的・人類学的な研究の観点を軽視する態度があったことに気づいた。

（４）1970 年代以降、日本固有の演劇ジャンルの儀式性を自分たちのギリシア悲劇上演の中へ積極的に取り入れ、世界に向けて発信するギリシア悲劇上演の流れがあり、その現在の代表的事例は、演出家宮城聰氏による一連のギリシア悲劇上演といえる。他方、1958 年から 1971 年まで続いた東京大学ギリシア悲劇研究会は、少なくとも日本固有の伝統的な演劇ジャンルの様式を積極的に利用しなかった。これらの上演活動を詳細に比較・対照する研究を行うことで、日本における古代ギリシア・ローマ演劇の学術研究と演劇上演の今後の望ましいあり方を示唆するための手がかりを見出せるのではないか、という見通しをつけるに至った。

古代ギリシア演劇について、儀礼や神話に焦点を当てた社会的・宗教的背景から理解されるべきであるとする研究と上演の伝統が西洋には存在する一方、日本の西洋古典学者や演出家たちの多くは、そうした研究の伝統を十分に受容してこなかった。他方、日本における古代ギリシア演劇受容は、明治以来すでに 100 年以上の歴史をもつが、言語的な問題もあり、西欧世界では広く認識されていない。また、日本の伝統芸能である能は、儀礼的・形式的な側面から、これまでも西欧の古代ギリシア演劇研究者を強く惹きつけてきたが、近年、日本発の古代ギリシア悲劇上演において、能等の要素を活用した演出が行われ、海外で評価を得る事例も出てきている。しかし、日本の古代ギリシア演劇研究においては、そうした動向への注目が不十分であり、未だに空白地帯が存在する。

本研究は、そうした状況をふまえて、日本の古代ギリシア演劇研究の空白を埋めるものであり、西欧の研究者も交えた日本発信の研究として、相互の情報の不均衡を補いながら、現行の古代ギリシア演劇受容に関する国際的な研究にも大きく貢献するものである。

２．研究の目的

日本の古代ギリシア演劇の研究と受容について、その多くは国内的なものに留まっているように思われる。従前の研究を通して、我々は、そうした状況を生んでいる決定的な要因

として、西洋の伝統的演劇と（日本の伝統的演劇を含む）儀礼的パフォーマンスに関して西洋の研究者・演出家たちが行った人類学的・比較論的研究や受容の在り方への積極的眼差しの有無が関わっているのではないか、と考えるに至った。本研究は、この認識を基本的な作業仮設として、各事例を比較対照することで、日本人によるギリシア演劇の研究と上演の諸形態を規定するものについて分析することを大きな目的とし、より具体的には、相互に関連する以下の３部門に細分化される。

（１）我々は、日本における明治以降のギリシア悲劇上演の実態に関する網羅的研究を通じて、近現代の日本におけるギリシア悲劇上演を代表する最重要の事例は、1958 年から 1971 年まで続いた東京大学ギリシア悲劇研究会の上演活動と、1970 年以来の、鈴木忠志、蜷川幸雄、宮城聰らによる一連の上演活動である、という仮説をより明確に認識するに至った。このうち、東京大学ギリシア悲劇研究会については、これまで我々が行った研究の調査期間中、我々は多くの未公開資料を発見するという成果を上げ、現在デジタルアーカイブ化の作業の途上にある。これらの資料を所有する東京大学ギリシア悲劇研究会の旧メンバーたちが相当の高齢に達しており、重要な史実に関して急遽聞き取り調査を行うべき現状を鑑みる限り、東京大学ギリシア悲劇研究会に関する一次資料のデジタルアーカイブを構築することが目下の最重要課題であると考えた。また、構築したアーカイブは国外の古代ギリシア・ローマ演劇上演データベースと連携する予定である。

（２）我々は従前の調査によって東京大学ギリシア悲劇研究会のギリシア悲劇上演の根本的な特徴が、能や歌舞伎等の日本の伝統的な演劇要素を排除した上演形態に存するという仮説をより明確に認識するに至った。一方、これとは対照的に、70 年代以降、鈴木忠志、蜷川幸雄、宮城聰によって行われた上演活動の根本的特徴は、日本の伝統的な演劇要素を何らかの形で積極的に活用する上演形態に存する。両者の相違をふまえて、我々は、明治以来行われた様々な上演活動に関する資料の収集と分析をさらに進めつつ、特に日本の伝統的な演劇に対する態度決定という点から類型論的な分類を試みた。そして、伝統的な演劇要素を積極的に利用するか否かという態度決定について、それを偶発的な特徴と認識するのではなく、この態度決定を生じさせた文化的・政治的背景や原因ないし動機を重要な要因として考察した。

（３）日本の多くのアカデミックな古代ギリシア悲劇研究が国際的な比較の観点を欠き、国際的な期待を無視してきた事実が存在し、これと呼応するかのように、演出家たちも多くの場合は内向きの日本人による日本人のためのギリシア悲劇上演を行ってきた。そこで、日本のギリシア悲劇研究について、国際性を失い内向きの活動に留まってしまったと思われる事例を分析する。従来の日本における古代ギリシア悲劇研究で軽視されがちであった、古代ギリシア悲劇が宗教儀礼であり、パフォーマンスであるという大前提に立った、儀礼的パフォーマンスに関する比較論的・人類学的な研究の観点を国際研究協力によって見直し、日本の能なども視野に入れた比較論的・人類学的な諸前提と、それらを研究しつつ上演活動を行った西洋のアカデミックな研究者たちや非アカデミックな演出家たちの活動を確認し、日本の諸事例と対照して検討した。ここで得られる知見を日本における研究と実践（上演活動）に再統合することによって、日本人によるギリシア悲劇研究および上演活動が、国際性と（海外からの期待に十分応えうる）本来の姿を再獲得する可能性を提示する。

３．研究の方法

すでに述べてきたとおり、本研究は、日本における古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容・上演を西洋におけるそれらと比較・対照するものであり、先に行った基盤研究（C）

17K02590 と同様、研究・意見交換・デジタルアーカイブ化・研究成果の発信を国際的な場において英語ないし仏語で行うという独自の特徴をもつ。この二重に国際性を有する比較研究によって、日本の西洋古典学研究と古代ギリシア・ローマ演劇の受容・上演に存在する特徴と根本的な問題点を照射すると共に、日本における古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容・上演が将来進むべき方向性を示唆するものとなると考えた。

【2020（令和２）年度の計画】8 月から 9 月の間に少なくとも２名が英国 Oxford に渡航し、英語で研究報告を行うとともに、ギリシア悲劇と儀礼的パフォーマンスの比較研究を行う海外の共同研究者たちと情報・意見交換、国際シンポジウムや講演会に関する打ち合わせ等を行う（Adele Scafuro 氏、Vanessa Cazzato 氏、Maxime Pierre 氏、Fiona Macintosh 氏等の海外共同研究者とは、すでに基盤研究（C） 17K02590 以来協力関係にある）。一方、野津（研究代表者）と吉川（分担研究者）は、東京大学ギリシア悲劇研究会の１次資料の収集と電子化公開に特化した具体的作業を進め、すでにアーカイブ化できているデータについては情報の英語訳を進める。また、前期に Cazzato 氏を招聘し、ギリシア悲劇・ギリシア抒情詩・能の比較研究に関して「第１回国際シンポジウム」を開催。夏期休暇中に Oxford において「第２回国際シンポジウム」を開催（上記の海外研究者に参加を依頼）。

【2021(令和３)年度の計画】8 月までに本研究の「儀礼的なパフォーマンスとギリシア悲劇に関する西欧の人類学的・比較論的研究と受容の在り方への積極的眼差しの有無が、わが国における古代ギリシア演劇の研究と受容を国内的なものにするか、国際的なものにするかの分かれ道だった」という作業仮説の実証的かつ文献学的な検討を終える。この調査に基づき、この作業仮説の検証を行う意味で、夏期休暇中に Oxford で、本研究の研究代表者と研究分担者から少なくとも２名参加する「第３回国際シンポジウム」を開催する。

【2022(令和４)年度の計画】8 月中に Oxford 大学古典学部内で「第４回国際シンポジウム」を開催し、研究代表者と研究分担者のうち少なくとも２名及び海外の研究協力者が研究成果を発表する。研究期間内に行ったシンポジウムの発表内容と研究成果を、ウェブサイトで公開すると共に、欧文の報告書にまとめる。東京大学ギリシア悲劇研究会のデジタルアーカイブ化の担当者２名は、アーカイブ作業を完了。期間内に集積することが出来た上演データの英語訳と、Oxford 大学古典学科に属する APGRD のデータベースとの連結作業を完成させる。野津（研究代表者）は、各部門（研究目的・内容（１）～（３））の担当者の報告をまとめ、我々の作業仮説の検証を進め、その結果を集約・評価し、欧文の報告書にまとめる。

４．研究成果

【2020（令和２）年度】当初の予定では、令和 2 年度 8 月から 9 月の間に英国 Oxford に渡航し英語で研究報告を行い、ギリシア悲劇と儀礼的パフォーマンスの比較研究を行う海外の共同研究 者たちと情報・意見交換を行うと共に、国際シンポジウムや講演会に関する打ち合わせ等を行う予定であったが、折からのコロナ禍による渡航制限のため、予定していた英国への渡航が叶わなかった。海外の研究者との議論や打ち合わせについては主に葛西(分担研究者)が主導して、V. Cazzato 氏、F. Lisssarrague 氏、M. Pierre 氏と共に続けてた。パリ第 7 大学の Maxime Pierre 氏との共同研究は、主に遠隔会議システムを利用して進行した。令和 2 年度 1 2 月には、野津(研究代表者)が講演をパリ第 7 大学で 2 回行った（Zoom による遠隔講演）。国内での研究もコロナ禍のため大きな制限を被ることになったが、野津(研究 代表者)と吉川(分担研究者)は、資料提供者の方々から許可を取りつつ自宅を訪問し、東京大学ギリシア悲劇研究会の 1 次資料の収集と電子化公開に特化したデータの

アーカイブ化を進めた。当初予定していた「ギリシア悲劇・ギリシア抒情詩・能の比較研究に関する、第 1 回国際シンポジウム」も開催できなかった。

【2021(令和３)年度】

令和 3 年度の夏に英国へ渡航しオックスフォードで国際シンポジウムを開催すると共にギリシア悲劇と儀礼的パフォーマンスの比較研究を行う海外の共同研究者たちと情報・意見交換を行う予定だったが、コロナ禍の渡航制限のために実現できなかった。令和 4 年度の夏にようやくこの国際シンポジウムを行うことができる見通しとなったので、メールや遠隔会議システムを用いることにより、海外の研究協力者たちとの打ち合わせを続けた。野津(研究代表者)と吉川(分担研究者)は、すでに収集済みの東京大学ギリシア悲劇研究会の 1 次資料に関して、これらの資料の電子化公開に特化した具体的作業を定期的に行った。これらの資料の大部分(パンフレット、定期刊行物、写真、ポスター等)については電子データ化を終えた。また、令和 3 年度に予定されていた Cazzato 氏の 招聘は、コロナ禍の諸々の制約のため令和 4 年度に延期された。ギリシア悲劇とその日本における受容と上演に関して、2022 年 3 月 30 日、信州大学(松本)で研究会を開催した。その際、研究分担者の吉川は「「ギリ研」関連資料のデジタル化について」と、題する発表を行い、資料のデジタル化の経過報告とこれまでの作業で実際に直面するに至った技術的な諸問題について情報交換を行なった。同研究会において、研究代表者の野津は「フランスと日本におけるギリシア悲劇上演:GTA, ギリ研, Demodocos」と題する発表を行い、東京大学ギリシア悲劇研究会とフランスの学生によるギリシア悲劇上演活動の比較を行ない、これら 2 つの学生演劇グループの活動の間に存する類似性や相違性について明らかにする努力を行なった。

【2022(令和４)年度】

8 月には英国の Oxford にて国際的な研究報告会を開催し、主に野津(研究代表者)と葛西(分担研究者)が主導し、海外の研究者たちとギリシア悲劇と儀礼的パフォーマンスの比較研究に関する意見交換と今後の研究の打ち合わせ等を行った。7 月から 12 月には M. Pierre 氏の来日し、能とオペラを融合したギリシア悲劇上演の実地調査を行い、SPAC の『メディア』上演に関し宮城總氏のインタビューを行った。野津(研究代表者)は 8 月、Oxford 大学の APGRD を訪問し、我々のデータベースと APGRD のデータベースの結合に関する話し合いを行い、9 月にはオルレアン大学で日本におけるギリシア悲劇上演の歴史に関する研究発表を行った。葛西(研究分担者)は令和 3 年秋から 1 年間のケンブリッジ大学での在外研究において、悲劇の上演と儀礼に関して一連の口頭発表を行った。野津(研究代表者)と吉川(分担研究者)は東京大学ギリシア悲劇研究会の 1 次資料の収集と電子化公開に特化したデータのアーカイブ化を進め、吉川は「東京大学ギリシア悲劇研究会」の各種資料をデジタル化し、一部をウェブサイト上で公開した。汎用的な機材を使用し、吉川が中心となって、撮影、データ整理、サーバー構築、公開等を行い、資料のデジタル化及び公開にあたっての知見の蓄積を試みた。デジタル画像公開に関わる共通規格である IIIF 対応を主眼として、オープンソースのシステムを可能な限り利用し、各種サーバー構築・設定や、ウェブサイトへのビューアーの組み込み、またサーバー仕様に沿った画像やメタ情報の作成方法など、試行錯誤を繰り返しな がらも、作業が完了した範囲の公開に至った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 納富信留	４．巻 69
２．論文標題 ソフィストたちのオリンピック ―文化・政治・哲学的意義―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西洋古典学研究	６．最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Noburu Notomi	４．巻 23
２．論文標題 Plato, Isocrates and Epistolary Literature: Reconsidering the Seventh Letter in its contexts	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Plato Journal	６．最初と最後の頁 67-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14195/2183-4105_23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Noburu Notomi	４．巻 60-3
２．論文標題 Images and Imagination in Plato’s Republic and Sophist	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Journal of Greco-Roman Studies	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.23933/jgrs.2021.60.3.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 納富信留	４．巻 29
２．論文標題 プラトン『パイドン』はどう読まれたか、どう読むべきか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 西日本哲学会年報	６．最初と最後の頁 41-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yasunori Kasai	4．巻 1
2．論文標題 Libri Juridici Jacobi Goyeri --- A Preliminary Study ---	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『藤花のたわむれー久保正彰先生の卒寿を祝して』Bibliotheca Wisteriana	6．最初と最後の頁 257-300
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yasunori Kasai	4．巻 53
2．論文標題 Bogisic and 'Ancient Law'	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Scientific Meeting Volume 157, Department of Social Sciences	6．最初と最後の頁 93-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 納富信留	4．巻 4
2．論文標題 古代哲学をどう読むか ―レオ・シュトラウスとプラトンと私	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ひらく	6．最初と最後の頁 89-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 納富信留	4．巻 605
2．論文標題 大西祝の批評主義から見る『哲学雑誌』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 哲学研究	6．最初と最後の頁 50-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 納富信留	4．巻 142
2．論文標題 浄めとしてのオリンピック ―エンペドクレスの奇跡	5．発行年 2020年
3．雑誌名 三田文学	6．最初と最後の頁 196-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hiroshi Notsu	4．巻 1
2．論文標題 Some Questions on the Acharnians of Aristophanes: Names of Amphitheos and Dicaeopolis	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Dancing Wisteria: Essays in Honour of Professor Masaaki Kubo on his Ninetieth Birthday (『藤花のたわむれ，久保正彰先生の卒寿を祝して，久保正彰先生卒寿記念論集』	6．最初と最後の頁 301-309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　8件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 Noburu Notomi
2．発表標題 Japanese Philosophers on Plato’s Ideas
3．学会等名 London Lectures 2021: Expanding Horizons（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 納富信留
2．発表標題 ギリシア哲学が直面した運命と偶然―ソフォクレス『オイディプス王』とアリストテレス『詩学』を中心に―
3．学会等名 比較思想学会第48回大会（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 ソフィストたちのオリンピック―宗教・文化・政治的意義―
３．学会等名 西洋古典学会第71回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉川斉
２．発表標題 「ギリ研」関連資料のデジタル化について
３．学会等名 西洋古典と西洋法の受容： ギリシア悲劇とその上演，ローマ文学の受容，西洋法の翻訳
４．発表年 2022年

１．発表者名 野津寛
２．発表標題 フランスと日本におけるギリシア悲劇上演：GTA，ギリ研，Demodocos
３．学会等名 西洋古典と西洋法の受容： ギリシア悲劇とその上演，ローマ文学の受容，西洋法の翻訳
４．発表年 2022年

１．発表者名 野津寛
２．発表標題 アプレイウス『変身物語』とプラトンのテキスト
３．学会等名 ギリシャ哲学セミナー、プラトンのエロース論
４．発表年 2021年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 プラトン『パイドン』はどう読まれたか、どう読むべきか
３．学会等名 西日本哲学会第71回大会シンポジウム「魂の不死をめぐる系譜―古代哲学と近代哲学のダイアローグ」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 Images and Imagination in Plato’s Republic and Sophist
３．学会等名 The 3rd Asia Regional Meeting of the International Plato Society, Plenary Session, Seoul National University (Online)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 Socrates among the sophists: reconsidering his position in the fifth century BC
３．学会等名 ISSS (International Society for Socratic Studies), Virtual Socrates Colloquium 8（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hiroshi Notsu [南英明氏との共同発表]
２．発表標題 Apuleius, Metamorphoses: 物語の構造と解釈
３．学会等名 日仏ギリシア・ローマ学会WEBセミナー2020【第１回】, Webセミナー
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hiroshi Notsu
２．発表標題 Mises en scenene d'Antigone de Sophocle par Satoshi Miyagi
３．学会等名 Universite de Paris, Le Centre d’etudes et de Recherches Interdisciplinaires de l’UFR Lettres（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hiroshi Notsu
２．発表標題 Un aspect de la reception des lettres classiques au Japon: le club de tragedie grecque de l’Universite; de Tokyo
３．学会等名 Universite de Paris, Le Centre d’etudes et de Recherches Interdisciplinaires de l’UFR Lettres, Arts, Cinema（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 納富信留	４．発行年 2022年
２．出版社 放送大学教育振興会	５．総ページ数 253
３．書名 西洋哲学の根源2	

１．著者名 葛西康徳	４．発行年 2022年
２．出版社 Bibliotheca Wisteriana	５．総ページ数 270
３．書名 文化転移	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://labantique.hypotheses.org/1126

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	納富　信留 (Notomi Noburu) (50294848)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	吉川　斉 (Yoshikawa Hitoshi) (60773851)	成城大学・文芸学部・准教授 (32630)	
研究分担者	葛西　康徳 (Kasai Yasunori) (80114437)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関